

出会いと表現が生むエンゲージメントと自己肯定感の高まり ～高大連携による自己表現活動の実践を通して～

群馬県立尾瀬高等学校 今山 廉

《研究の概要》

本研究は、群馬県立尾瀬高等学校普通科における「スクールエンゲージメントの不足」と「自己肯定感の低さ」という二つの課題に対応した教育実践である。本校普通科の生徒は学校への誇りを持ちにくく、正解を求めて無難に行動する傾向が見られた。そこで「尾瀬高校魅力発信プロジェクト」を実施し、大学・企業と連携して学校の魅力を探究・表現する機会を設けた。活動はブレストやキャッチコピー作成、フライヤーデザイン、外部発表を通じて構成され、生徒は仲間や社会からの承認体験を得ながら自己表現に挑戦した。その結果、日常に潜む学校の魅力を再発見し、自分の言葉で表現する素地を養うことができた。

キーワード

【スクールエンゲージメント 自己肯定感 高大連携 自分らしさ】

1. はじめに

群馬県立尾瀬高等学校は、沼田市利根町平川に位置する地域密着型の小規模校である。1962年に沼田高等学校武尊分校として創立し、1996年に群馬県立尾瀬高等学校と改称して現在に至っている。現在は普通科と自然環境科を併設し、全校生徒は106名、1学年2学級という規模である。自然環境科は全国初の設置であり、地域の多様なフィールドを活用した体験的な教育を展開している。この取組は県内外で高く評価され、毎年いくつもの賞を受賞している。生徒の多くは動植物に強い関心を寄せているほか、休日にも自主的に活動し興味を深める姿や、地域住民と協力して地域おこしに取り組む姿も見られる。

一方で普通科には、地元の利根町や片品村の中学校出身者が多く、入学動機も「家から近い」「中高一貫の連携校だから」といった理由が少なくない。そのため「何かやりたくてこの学校を選んだ」というよりも、惰性的に尾瀬高校に進学してきた生徒が多い傾向にある。そのため自己肯定感の低さや、学校への誇りや愛校心の不足が生徒の言動に表れることが少なくない。

2. 課題の背景と整理

2.1 スクールエンゲージメント

生徒による学校への帰属意識、関わりは「スクールエンゲージメント」という言葉で整理されている。これは、生徒が学校という環境に対して抱く関わりや帰属意識を示すものであり、学習や行事への参加意欲、学校生活全般に対する満足感や誇りと密接に関係している。エンゲージメントが高い生徒は、学校を自己の居場所として肯定的に受け止め、主体的な学習や活動に取り組む傾向がある。一方でエンゲージメントが低い場合、学校生活への無関心が強まり、学びや自己成長に対しても消極的になりやすいことが指摘されている。

2.2 スクールエンゲージメントの不足

本校の普通科においても、この「スクールエンゲージメント」の不足が大きな課題として見てきた。先に述べたとおり、本校の自然環境科には、県内外から目的意識を持った生徒が多く入学している。その存在は学校全体の特色を示す一方で、注目が自然環境科に集中する傾向を生み出している。それに対して普通科では、

「尾瀬高校の普通科には魅力がない」という固定観念が生徒の間に強く存在する。学校の魅力を問うても「少人数」「自然が豊か」といった表面的な答えが大半（図1）であり、自らが置かれている環境を価値あるものとして捉える視点に乏しい。学校や地域の独自性や豊かさに気づく機会を逃しているのである。

実際には、普通科にも地元出身だからこそ享受できる豊かな人間関係や、地域社会とのつながりを通して得られる多様な学びなど、多くの魅力が存在している。その価値を自覚できないことこそが、学校への誇りや帰属意識の低下を招いており、結果としてスクールエンゲージメントの不足につながっていると考えられる。

2.3 普通科生徒の自己肯定感の低さ

さらに本校普通科の生徒には、「正解を求める」傾向が顕著に見られる。課題に直面するとすぐにインターネット検索を行い、提示された模範的な方法や答えをそのまま適用することで安心しようと



図1 尾瀬高校の魅力はどこにあると思うか（活動前）

する姿が繰り返し観察された。成果物を作成する際にも「作り方」を検索し、手順に沿って無難に仕上げる生徒が多く、自分の考えや工夫を盛り込むことは少ない。

このような正解志向の背景には、自己肯定感の低さがあると考えられる。すなわち、自分の判断や表現に自信を持ってないため、「正解」に従うことで安全を確保しようとする心理が働いているのである。その結果、個性や独自性が抑制され、均一化された成果物が出来上がりやすい。

2.4 課題の整理

以上のように本校普通科の生徒には、二つの大きな課題が見られる。第一に、学校や環境に価値を見いだせず、帰属意識が十分に育っていないことである。これは学校への関心や誇りの不足として現れ、スクールエンゲージメントの低さとして整理できる。第二に、課題に対して「正解」を過度に求め、自らの表現に踏み出しにくい傾向である。その背景には、自己肯定感の不足から来る自信のなさがあると考えられる。

この二つの課題は独立しているのではなく、相互に関連し合い、負の循環を生んでいる可能性がある。すなわち、学校に誇りを持って帰属意識が弱いために、「自分がここで価値を発揮できている」という実感を得にくく、自己肯定感がさらに低下する。また、自分に自信が持てないために学校や環境の価値を積極的に見いだせず、結果としてスクールエンゲージメントが深まらない。こうした悪循環の中で、生徒の学習意欲や挑戦心が抑制されていると考えられる。

本論文では、こうした課題に対応する取組として実施した「尾瀬高校魅力発信プロジェクト」を報告する。生徒が自ら学校の魅力を見だし、自分の言葉で表現し、社会に発信する機会を通じて、スクールエンゲージメントと自己肯定感を高めることをねらいとした教育実践である。

3. 実践の目的と方法

3.1 実践の目的

本実践は高崎商科大学との高大連携事業として取り組んだ。最終的な目標は、生徒が「尾瀬高校の普通科に入ってよかったと思える自分になる」ことである。この姿は、学校への誇りや愛着を持ち（スクールエンゲージメントの向上）、自分らしく表現できる自信を育てている（自己肯定感の向上）状態を指す。

そのために、生徒が学校の魅力を自ら発見し、自分の言葉や感覚で表現する活動を積み重ねることを通じて、学校と自分に対して正の感情を抱けるようにすることを意図した。さらに、大学や企業など多様な大人との関わりを取り入れることで、様々な視点から生徒にフィードバックを行い、気づきを与えられる機会とした。

3.2 活動内容

具体的な活動内容としては、学校をPRするフライヤー（チラシ）のデザイン案を4人1班になり作成する、というものである。生徒はデザイン案を作成・発表し、最後のプレゼンテーションで選ばれた班のものを次年度以降の学校広報で活用する。生徒は、あくまでもデザイン案までの作成とし、プロのデザイナーに整えていただく。以下に詳細な活動の計画とその目的（意図）を示す。

3.3 実践の流れと設計

3.3.1 導入フェーズ

このフェーズでは、生徒が「自分の意見を安心して出す」「失敗を恐れず挑戦する」ための心理的基盤を築くことを重視した。従来の生徒には「正解を探す」傾向が強く、自由な発想や自分らしい表現を避け

る姿勢が見られた。そこで、否定しない・褒め合う雰囲気をつくり、表現すること自体を楽しめる経験を設計した。

(1) プレストワークショップ

ブレンストーミングの考え方や基礎を学び、面白法人カヤックのプレストカードや「こんな学校は嫌だ」というお題で練習を行った。プレストカードを用いることで、ユーモラスで自由な発想を促した。とにかくアイデアを表に出す練習として実施し、アイデア出しのハードルを下げることを狙いとした。

(2) デザイン講座

プロのイラストレーターから「伝わるデザイン」の事例を学び、成果物イメージを具体的に持たせるとともに、広告やポスターの事例を通して、色や文字、レイアウトが持つ意味を理解し、デザインは単なる装飾ではなく「相手に伝えるための工夫」であることを狙いとした。

(3) しくじり先生

本校職員や高崎商科大学の教授が、自身の失敗談や挫折経験を「しくじり先生」と題して語る機会とした。身近な大人の赤裸々な体験は「大人も完璧ではない」という気づきを与え、「挑戦してもよい」という安心感を生徒に届けることを狙いとした。

(4) 推しの尾瀬高校を見つける

校内で「自分の推しの場所」を撮影し、その理由を言語化する活動を通じて、日常の中にある学校の魅力を再発見し、「ここが好き」と感じる瞬間を探させることで、学校生活をもう一度見つめ直すことを狙いとした。提出まで一定期間を設けることで、日常生活の中にその魅力を探すアンテナを立てさせ、より自分らしい魅力を引き出そうと考えた。

3.3.2 探究フェーズ

このフェーズでは、生徒が自分たちの学校を改めて見つめ直し、その魅力を「言葉」と「デザイン」によって表現することに挑戦した。活動を通じて「誰に伝えるのか」「どのように伝えるのか」を考え、表面的な答えではなく、尾瀬高校で生活しているからこそわかる魅力を形にする力を育むことを狙いとした。

(5) キャッチコピー講座&キャッチコピーマッチ

大学広報担当者やプロのコピーライターによる講座を通じて、学校の魅力を短い言葉に凝縮する力を養った。その後、生徒が作成したキャッチコピーに対して専門家から講評を受ける機会を設け、表現を磨くと同時に、外部からの承認体験を得られるように設計した。

(6) フライヤーデザインの構想

伝えたいターゲットやメッセージを整理し、大学生と対話を重ねることで、相手を意識した主体的なデザイン思考を促した。自分らしい工夫を盛り込んだデザインを試行錯誤しながら作成した。発表練習も併せて行い、伝える手段を磨き上げるプロセスを重視した。

ここまでの学びを活かし、実際に学校の魅力を伝えるフライヤーを構想した。ここでは「誰に伝えたいのか(ターゲット)」「何を伝えたいのか(メッセージ)」を班ごとに整理し、どういうデザインであればそれが体現できるのかを検討した。そして、高崎商科大学の大学生とも協働し、生徒の意見を引き出しながらデザイン作成を支援してもらった。

3.3.3 表現フェーズ

このフェーズでは、これまでの「型にはまった」表現ではなく、自分たちらしくまとめた成果物を、自分たちらしく表現できることを目的としている。単に表現するだけでなく、自分たちなりの表現を社会の第一線で活躍される審査員から評価されることで、肯定的な気づきを与えたいという狙いがある。

(7)フライヤーマッチ

高崎商科大学のSKYアトリウムで「尾瀬高校生フライヤープレゼンテーションマッチ」と題した発表会を設定した。審査員を、株式会社リクルート、株式会社進研アド、株式会社電通、朝日新聞社、日本経済新聞社、上毛新聞社、群馬テレビ株式会社からお招きした。社会の第一線で活躍されている大人からの講評を受けることで、社会的な承認体験と達成感を獲得することを狙った。フライヤーマッチに先立ち、東京都にある新渡戸文化中学校・高等学校副校長である山藤旅聞氏による基調講演を実施した。



図2 発表会チラシ

4. 実践の記録と生徒の様子

本章では、3章でまとめた各活動における実践の記録と、生徒の反応及び様子をまとめる。

4.1 導入フェーズ

(1) ブレストワークショップ

ブレインストーミングの基本である「なんでも褒める」ことを徹底し、意見の内容ではなく「発言そのもの」を肯定するようにした。その結果、当初は控えめだった生徒も次第に発言を重ね、笑いや拍手が自然に生まれる場面が見られた。

十分に雰囲気が出たのち、「尾瀬高校の魅力とは何か」をテーマに意見出しを行った。ここで出た尾瀬高校の魅力は以下のようなものがある。



図3 活動の様子

表1 ブレストワークショップで出た尾瀬高校の魅力

ありのままの自分でいい	個性で溢れている	バカができる
地域の人が優しい	魔法で作ったかのような学校	ひらめきがすごい
先生と生徒の仲がいい	アホでよい	明るい空気

これまで図1で示したように「少人数」「自然が豊か」といった表面的な回答が多かったが、上表のようにより具体的かつ尾瀬高校で生活しているからこそ気づける魅力が出され始めた。実践後のリフレクションでは、「自分では思いつかないことを友達が言っていて面白かった」「尾瀬高校の魅力を考えるのは難しいけど、みんなで話すと少し見えてきた」と記述する生徒もいた。

(2) デザイン講座

これまでの生徒は、インターネット上のテンプレートを編集し、「きれいにまとめる」ことを意識していた。本講義を受け、意図をもって情報をデザインすることの重要性に気づくとともに、「きれいにまとめる」から「どうすれば伝わるか」という視点へと意識を変化させたと考えられる。

(3) しくじり先生

本時間は、生徒にとって大変衝撃的だったようで、多くの生徒が「教員の失敗をはじめて知った」と話していた。教員は生徒にとって身近な大人の1人である。そのような大人の様々な「しくじり」を知らせることに、生徒にも等身大で居ていいのだ、という安心感を与えられたのではないかと考える。実際に実践後のリフレクションにおいても、「しくじり先生の回で、誰も完璧じゃないと改めて感じた」「先生方も完璧じゃないことが安心した」とコメントしている生徒もいた。

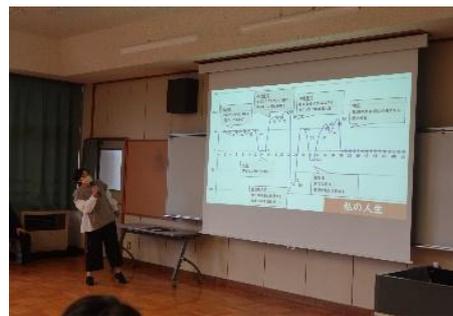


図4 しくじりエピソードを話す
本校教員

(4) 推しの尾瀬高校を見つける

この活動期間の前半では、多くの生徒が学校近くの自然の風景や、特徴的な建物である自然環境棟の写真撮影していた。もちろん、本当にそれがお気に入りの場所である生徒もいるが、普通科の生徒にとって、自然環境棟はなじみがない。そこで、「自分の本当のお気に入りの瞬間ってどんどころだろうか」と声掛けをした。すると、その後も同様の写真を撮影した生徒はいたが、何人かの生徒は「昼休みに水道で話しているの好きなんだよね」「先生方がモルックをやっているところを撮りたいです」などと話し、お気に入り場所、瞬間を写真に収めた。



図5①～③ 生徒が撮影したお気に入りの場所・瞬間

*左から、いつも話をしている水道、教員がモルックをしている瞬間、授業間休みの様子

小括

導入フェーズを通じて、生徒は「否定されない安心感の中で表現する」「表現は見た目ではなく伝わり方を意識する」「完璧でなくてもよい」「日常に潜む魅力を再発見する」といった気づきを得た。リフレクションには、「否定されないから安心して意見を言えた」「自分では思いつかないことを友達が言っていて面白かった」「尾瀬高校の魅力を考えるのは難しいけど、みんなで話すと少し見えてきた」といった声が寄せられている。これらは、発想や表現に挑戦するうえで必要な「考え方の土台づくり」ができたことを示しており、次の探究フェーズに進むための基盤となった。

4.2 探究フェーズ：学校の魅力を言葉とデザインで探る

(5) キャッチコピー講座及びキャッチコピーマッチ

ここでは、先のプレストワークショップで出た「尾瀬高校の魅力」をもとに、自分なりに魅力を言葉に変換する練習が重ねられた。ここでは、表2のようなキャッチコピーが生徒の中から生まれた。

表2 生徒が考えたキャッチコピー（一部）

キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い
布団以上の心地よさ	友達とも教員とも距離がなく話ができる、深く関わることのできる学校の居心地を表現した
声が意外と透き通る	自分の意見、声が届きやすい場所だと伝えたい
全てはここから！	尾瀬高校に來ればいろいろなことを学べ、また再スタートできるという思いを中学生に伝えたい。
個性という雪がつもる	生徒一人ひとりが個性豊か、自分の個性をより出せることを、この地域の特徴と合わせた

これらは、生徒自身の実感に根ざした等身大の言葉で表現したものであった。日常に潜む魅力を新しい視点で捉え直すことができ、さらにそれを自分らしい言葉でまとめ、表現できた点に、本実践の成果が見えてきたと考える。

(6) フライヤーデザインの構想

フライヤーデザインを構想するにあたって、まずターゲットの設定を行った。ここで設定されたターゲットは表3のとおりである。

表3 フライヤー作成にあたり設定されたターゲット（一部）

中学校までで学校に疲れた中学生	何か珍しいことを始めたい中学生
固定観念に囚われている人	新しいことに挑戦させたい保護者

従来の普通科生徒であれば、「受験生向け」「保護者向け」といった画一的な設定に終始していたと考えられる。しかし上記のように、生徒自身が経験を通して「こういう人にこそ尾瀬高校の魅力が届く」と考え抜いた結果として表現されている。これは、魅力を深く見いだせたからこそ、ターゲット像も自分たちらしく具体的に描くことができたといえる。

具体的なデザインを考えるにあたっては、とにかく対話を重視することを徹底した。班ごとに「本当は誰に何を伝えたいのか」「そのためにどのような見せ方ができるのか」を問いかけ合い、生徒のうちから様々なアイデアが出てきた。

制作の初期段階では、多くの班がただ情報を羅列して配置するにとどまっていた。しかし、活動を重ねるうちに「情報を受け取る相手の気持ちになる」という視点を持ち始め、単に「伝えたいこと」を並べるのではなく、「相手の心を動かせるもの」、「いかにして興味を引けるか」を意識するようになっていった。ある班は、尾瀬高校に入り個性豊かな仲間と出会ったことで、固定観念に縛られている自分に気づいたことを表現した。「捨てる勇気が考えを産む」というキャッチコピーを掲げ、「固定観念」と書かれた壁を壊す学生の姿と、その破片から新しい芽が出る様子をデザインした。（図6）



図6 生徒のデザイン案



図7 生徒のデザイン案②

さらに他の班では、新しいことや珍しいことに挑戦し、自分の無限大の可能性に気づくことができる尾瀬高校を表現した。「さあ！冒険に出よう」というキャッチコピーを掲げ、学校内で盛んにおこなわれている「モルック」をテーマに、広い世界へ広がっていく様子を宇宙の画像を用いてデザインした。（図7）

小括

このように、ブレストで見いだした魅力を等身大の言葉へ翻訳（キャッチコピー）し、受け手を具体化して可視化した結果、情報羅列から相手の心を動かす表現へと質的転換が起きた。また、「固定観念に囚われた人」など精緻なターゲット設定のもと、自分事の実感をメッセージに組み替え、自己表現力・他者視点で考える力などを伸ばした。

4.3 表現フェーズ

(7) フライヤーマッチ

フライヤーマッチに向け、全体で3度の練習を設定したが、初めの発表は班の個性が出にくい発表であり、情報をただ「伝える」ことに終始していた。そこで、デザインと同様に情報を「伝える」から「伝わる」へと考え方を試してみようように伝えた。そうすると、様々な試行錯誤を経て従来のように「原稿を暗記して読み上げる」方法ではなく、等身大の言葉で伝える姿が目立った。例えば、実物を持参してデモンストレーションを行ったり、小芝居を混ぜたり、某有名経営者のような身振り手振りを交えたりと、自分らしい表現方法が数多く見られたことは大きな変化であった。生徒の声からも、「自分の言葉で伝えたら相手の反応が良くて自信がついた」「練習の中で工夫するのが楽しかった」といった言葉が寄せられ、発表練習そのものが生徒の成長の機会となっていたと考えられる。発表では、生徒たちが自分の言葉でキャッチコピーの意図やデザインの工夫を語り、それぞれの班の個性が際立った。審査員からは、「生徒ならではの視点が新鮮」「大人顔負けのプレゼンだった」などといった講評が寄せられた。大勢の大人の前で自分たちの成果を堂々と発表でき、前向きなフィードバックをいただいたことは、生徒にとって大きな自信となり、「尾瀬高校の普通科でよかった」と思える実感を強める契機となった。

このプレゼンマッチで優勝した班は、尾瀬高校の自由でのびのびとした雰囲気がゆえに、自分自身が成長してきたことをテーマに、「型にハマらないゆるさ」をモチーフに、それをキャッチコピーと、ゆるく書かれたクマのイラストで表現した。（図10）

リフレクションには、「大人に褒めてもらえて本当に嬉しかった」「自分の考えを受け止めてもらえたと感じた」「次はもっと別のことに



図8 プレゼンの様子



図9 審査員の様子



図10 優勝したデザイン案

活動を重ねる中で、「自分でもできる」「自分の視点を表現してよい」という実感を持ち始めたことは、大きな変化である。

リフレクションには、「自分の考えが認められてうれしかった」「これまで挑戦しようと思わなかったことに挑戦できた」「意見を出してもいいんだと安心した」といった記述が見られた。これらは、生徒が小さな成功体験や承認体験を積むことで、自信を持ち始めたことを示している。

また、フライヤー制作や発表の過程で、自分の意見が仲間や大人に受け止められた経験は、生徒にとって大きな承認体験となった。例えば、審査員からキャッチコピーやデザインに対して肯定的なコメントを受けたことが「もっとやってみたい」という意欲につながり、後の課題研究や学校行事でも自主的に役割を担おうとする姿勢が見られるようになった。

さらに、生徒が「普通に合わせる必要はない」「このままの自分でよい」と感じられるようになったことは、単なる表現方法の変化にとどまらず、自己そのものを肯定する感覚の芽生えを意味している。これにより、従来は失敗を恐れて避けていた挑戦にも、楽しみや面白さを感じながら取り組めるようになった。

総じて、本実践は生徒にとって、自己肯定感を高めるための小さな成功体験と承認体験を積み重ねる場となった。その結果、「自分らしく表現することは楽しい」「挑戦してよい」という姿勢が定着しつつあることが確認できた。

第6章 実践の評価

6.1 課題と成果の照合

本実践の出発点は、「スクールエンゲージメントの不足」と「自己肯定感の不足」という二つの課題であった。結果として、生徒は学校の魅力を再発見し、帰属意識を高め、自分らしい表現に踏み出す姿を見せた。これらは当初掲げた課題意識に対応する成果であり、仮説として立てた二つの課題の解消に一定の効果があつたといえる。特に、学校の魅力を言葉にする過程で生徒が「尾瀬高校でよかった」と肯定的に捉えるようになったことは、エンゲージメントの向上を示している。また、等身大の言葉や独自の表現方法を用いた発表は、自己肯定感の高まりと密接に結びついていた。

6.2 成果の背景

本実践で得られた成果の背景には、大学やプロフェッショナル・企業との連携を通じて生徒に多様な他者との接点を生み出し、そこで得られた本格的なフィードバックと承認体験が学びを校内に閉じない社会接続型へと転化させた点があると考えられる。具体的には、コピーライターやイラストレーター、大学教員らとの対話が新たな視点をもたらし、自らの探究や産出物を「社会に通じるもの」と捉え直す契機となり、自己理解・学校理解の深化を促進した。

さらに、外部との関わりが後押しする自分らしい表現活動は、生徒の「わくわく感」を喚起し、挑戦意欲や学習意欲を継続的に高める内発的動機づけの循環を形成した。以上より、本実践は〈連携による社会的承認〉と〈自己表現による内発的動機づけ〉を相互に作用させることで、生徒の内面的成長とスクールエンゲージメントの向上を同時に実現したと考える。

6.3 今後の課題

一方で、本実践にはいくつかの課題も存在する。第一に、活動の成果は短期的には確認できたが、長期的に自己肯定感やエンゲージメントが維持されるかは明らかではない。第二に、普通科のすべての生徒に均等な変化が見られたわけではなく、依然として挑戦に消極的な生徒も存在する。今後は、活動を単発で終わらせず、他学年や他教科に横展開し、継続的な仕組みにする必要がある。

7. おわりに

7.1 総括

本実践は、「尾瀬高校の普通科に入ってよかったと思える自分になる」という目標のもと、生徒が学校の魅力を再発見し、自分らしく表現する活動を展開した。その過程で、生徒は学校への帰属意識を高め、自己表現のハードルを下げ、自己肯定感を高める経験を重ねた。これらの成果は、学びを学校内に閉じ込めず、社会や地域と結び付けた教育活動が生徒の内面的な成長を促すことを示唆している。

7.2 今後への展望

今後は、この実践を地域教育や他学科の教育活動へと広げていく必要がある。具体的には、自然環境科や他の学科の生徒とも連携し、学科横断的な魅力発信を行うこと、さらに地域住民や中学生を巻き込む形で活動を展開することが考えられる。また、課題研究や総合的な探究の時間と接続することで、生徒の主体的な学びを持続的に支えることができるだろう。

総じて、本実践は「学校や地域に誇りを持ち、自分らしく表現できる生徒を育む教育」の一つのモデルとなり得る。その意義をさらに発展させ、継続的な教育実践として深化させていくことが求められる。



図12 生徒デザインをもとに具体化されたフライヤーのデザイン
*今年度より学校広報で活用されているほか、中央のクマは学校の公認キャラクターとなった。